

# 私の本棚

▶ 「データは騙る——改竄・捏造・不正を見抜く統計学」(ゲアリー・スミス著、早川書房)

ビッグデータ時代に住んでいる我々は、大量のデータを使えば、なんらかの正しい答えが出てくると思いがちだが、本書を読むと、それが、とんでもない勘違いであることがよくわかる。

著者は、そもそも私たち人類には認知ミスを起こす仕組みが

アクサ生命保険社長

安洩 聖司氏

あることから説き起こし、誤りの類型と具体的な事例をあげていく。データの省略や間違っただけで「平均」の使い方が出された論文で、大国が経済政策を誤ったという恐ろしい実例まである。

データを使い分けて都合の良い結果を出す手法はまだ分かりやすいが、意外に見過ごされているのが「生存者バイアス」という。例えば、ある医療機関が既存患者の満足率90%という調査を発表したとする。不満から来なくなった人と死亡した人が外れたという2つの生存者バイアスが、恐らく満足度を引き上げている。偉大な企業に変わる道筋を描いたベストセラー「ビジョナリーカンパニー2」も残念ながら例外ではないという。結果的に成功して現存する会社だけが分析されているからだ。

「ただのデータ」と「科学的に正しい分析」の違いを知っただけでも、ずいぶん視野が広がった思いだ。

